

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④⑧

願生、即ち得生

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第119回と120回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第117回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■一念に「断」が成り立つ

「それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『真宗聖典』63頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。この『無量寿経』の言葉を親鸞聖人は『教行信証』の「信巻」に引用しておられます。それは『聖典』では245頁の「真仏弟子」のご自釈の後です。これはどういう文脈かと言いますと、239頁を見ていただきますと、後ろから5行目、「諸衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」。これは本願成就の文です。ここに信の一念ということが出てくるわけですがけれども、このすぐ前のご自釈で、「一念」は、これ信樂開發の時剋の極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり」と。信樂が開発される時の時剋、これは極促だと。つまり念々の今だと。今が今に連続するような今、これは次の時を待たない。過去と未来を包んだ今。この今、我々が出遇っているこの今の会座なり、この今の時に利益を得る。「廣大難思の慶心」、出遇った無上功德の喜びを、今、味わう。こういうことが押さえられています。

その一念の内容が展開されてきて、「横超断四

流」と言われてくる。我々の流転の命、過去が現在に來たり、現在が未来に行くというふうに感じられる現在は、流転の現在。それを断つと。自分で断つのではない、横ざまに断たれる。本願力によって断たれると。『聖典』の243頁のご自釈ですが、「一念須臾の傾に速やかに疾く無上正真道を超証す、かるがゆえに「横超」と曰うなり」と。「一念須臾」、今です。横ざまに來たるものに出遇う。光に遇うということをお親鸞聖人は強く一念というところに押さえようとなさる。そこに、横超、超証と、超えると繰り返されるわけです。我々が自分で自分を越えた世界、有限の世界から無限の世界へ超越するのでない。横超の本願力である。その横超のはたらきを信するならば、そこに願成就の一念が成り立つ。そのことが五惡趣を截る、六道流転を超える。

我々はいつまでも流転の中にいるのではないか、だから生きているうちは駄目だ、死んでからしか行けないのではないか、などと考える浄土教もあるわけです。そういう浄土教は親鸞の浄土教ではない。それが、244頁の2行目のご自釈、「断」と言うのは、往相の一心を發起するがゆえに、生として当に受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。かるがゆえにすなわち頓に三有の生死を断絶す。「断」と言えるのは、それまでの苦惱の人生、流転の人生、闇の人生が完全に断たれるという事件が起こる、本願力との出遇いなのだ。それが往相の一心である。一心に一念、本当の今が与えられることがあるならば、そこに断が成り立つのだと。本願力のはたらきを信することにおいて完全に生死が超えられる。こういうすごいことをおっしゃるわけです。

■生死と涅槃との分水嶺に立つ

行にたまわった信心は無上功德だと。無上功德の内実とは、今、迷いの人生がここで超えられるのだと。名号に遇って闇が破られて願が満たされる、こう信ずる。そういうことにおいて成り立つものが真仏弟子である。そのご自釈で、「この信・行に由って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う」（『聖典』245頁）と。大涅槃を超証する。この超証は横超です。横超の超越をいただくことが真仏弟子なのだ。

そのことにおいて、「それ至心ありて安楽国に生まれんと願ずれば、智慧明らかに達し、功德殊勝を得べし」（同上）と、先ほどの『無量寿経』の言葉を引用される。願生すればそういう功德が起こるのだと。この願生は、先ほどの本願成就文の「願生彼国 即得往生 住不退転」の願生です。願生は即ち得生、「願生彼国 即得往生」という事実に出遇う。出遇わしめる原理が至心回向です。至心回向を受けるなら、「願生得生 住不退転」。住不退転という利益が願生者に与えられる。この至心回向は如来のお心だと。如来の至心が「南無阿弥陀仏」として呼びかけてくださっているのだと。「我が名を称えよ、我が名を念ぜよ」と。そういうふうにして我々を包んで止まない大悲の願心に触れるという事実、それが信の一念に立つということだと。願生すれば得生する。願生の位と得生の位は時が別ではありませんから、それが一念の内容です。それは「前念命終 後念即生」、前の念に死んで後の念に生まれかわる。常に今、念々に南無阿弥陀仏と共に流転の命が本願の命によみがえる。そういう事実を我々は生きていく。信の一念に過去と未来を包む。そういうように本願と値遇する。

信の一念をいただくということは、本願力に出遇うことにおいて横超断四流、つまり迷いの命が断たれるような、生死と涅槃との分水嶺に立つことができるのだと。自分で立つわけではない。横超の本願力によって分水嶺に立つことが成り立つと言うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2019年2月～2019年4月）一抄一

■2019年

- 2/1 第119回（通算第170回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/7 第14回研究員と学ぶ公開講座「親鸞が語る曇鸞—『高僧和讃』を中心にして—」担当：青柳研究員 ①2/7 ②2/14 ③2/21 ④2/28
- 2/8 ご命日のつどい
第21回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 2/14 第197回清沢満之研究会
- 2/15 第34回「『教行信証』と善導」研究会
- 2/16 日仏東洋学会シンポジウム（日仏会館）：〈司会〉飯島研究員
- 2/21 第12回『尊号真像銘文』研究会
山陽教区聖教学習会（姫路船場別院）：〈講師〉戸次研究員
- 2/22 第221回英訳『教行信証』研究会
- 2/25 第9回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会
- 3/1 第120回（通算第171回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/4 第5回清沢満之研究交流会 共通テーマ「井上円了と清沢満之」〈副題〉「仏教の近代化と「哲学」」親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉、「宗教と信の問題を焦点として」國學院大学研究開発推進機構准教授：星野靖二氏、「絶対・相対の関係と『大乘起信論』」専修大学ネットワーク情報学部特任教授：佐藤厚氏、〈コメンテーター〉天理大学人間学部教授：岡田正彦氏、〈司会〉真宗大谷派教学研究員：名和達宣氏（文京区・求道会館）
- 3/7 第222回英訳『教行信証』研究会
- 3/8 ご命日のつどい
第22回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 3/13 第13回『尊号真像銘文』研究会
- 3/14 第198回清沢満之研究会
- 3/15 第61回現代と親鸞の研究会「トマス・アクィナスにおける信仰と哲学—善・愛・恩寵を視点として—」東京大学大学院総合文化研究科准教授：山本芳久氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 3/25 第35回「『教行信証』と善導」研究会
- 4/9 第223回英訳『教行信証』研究会
- 4/12 ご命日のつどい
- 4/16 第16回親鸞仏教センターのつどい〈記念講演〉「往生のその先について」東洋大学学長：竹村牧男氏、「願生心と菩薩道」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/22 第14回『尊号真像銘文』研究会
- 4/23 第23回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 4/26 第10回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会